



世界に拡大した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、私たちの生活に甚大な影響を与え、私たちの日常を劇的に変えました。感染し、命を落とされた方も数多くおられます。その悲しみを遺族のそばにいて慰めることもできないもどかしさを感じた人も多くいます。その一方で、この感染症と恐怖に挑み、支えと慰めを差し出す人々もいます。このように世界全体が傷ついている中で、私たちは何をなすべきかが問われています。

この感染症が拡大し緊急事態宣言が出された頃、私は、忠実に外出自粛要請を守り、狭い部屋でじっとしていました。その間、有り余る時間を普段は決して見ない昼間のテレビのワイドショー等を見て情報を得ていました。しかし、毎日、毎日そのような生活を続けていて、だんだんと自分の心がすさんできているのに気づいたのです。常に誰かを糾弾し、怒りをぶつきたいという衝動に駆られているのです。誰かを批判したくなるような衝動を煽っていたのはテレビの情報です。テレビを見続けることはこの怒りを増幅させることになっていて、いつの間にか精神的に不健康になっていると感じました。

テレビを通してウイルスではなく「怒り」と「恐怖」が社会に蔓延している人はいくつかの試練を与えられた時に、「なぜこんなことになってしまったんだろう」「こんなことにならなければよかったのに」と起こったことを恨み、嘆き悲しんだりします。それは自然な感情であると思います。しかしながら人間には、起こってしまったことを恨み嘆いたあとに、この試練が自分に与えられた意味を考える力が備わっているのではないのでしょうか。その力を発揮することが、冒頭で紹介した「はく息は感謝でありますように」と願い、「感謝の息をはく」ということなのだと思います。もちろん、コロナ禍で大切な人を亡くしたり、経済的に大変な思いをするなどの深い悲しみや苦しみにある方はこの限りではありません。

世の中には悲しいニュースや不快になる出来事などが報道されていますが、一方でこの状況が人のやさしさやあたたかい気持ちに気付かせてくれたという報道も見られます。新型コロナウイルス感染症の出現という状況は「不幸」であっても、そこから「感謝」が生まれるような社会であって欲しいと思います。

です。自粛せずに歩いている人や、営業している店をさらし者にして人々の怒りを煽り、その矛先を彼らに向けさせています。それに煽られて「自粛警察」と称される匿名でその店や個人を攻撃したり中傷したりする人が出始めました。さらに感染者や医療従事者とその家族に対する理不尽な差別や中傷も問題になっています。感染者や濃厚接触者がでた学校関係者からこんな報告もありました。その保護者たちから絶対に子供が濃厚接触者になつたことを他の生徒や保護者に知らせないでほしいと願ってきたということです。知られればいじめの対象になると恐れたのです。このようなことを心配しなければならぬ社会というのとはなんと閉塞的で息苦しいことでしょうか。私たち一人一人はそのことを理解しているはずなのに何故、世間全体の空気がこうなってしまうのでしょうか。



旭川藤幼稚園 (施設型給付幼稚園)

本園は昭和30年に設立し、創立者であるSr.クサヴェラ・カタリナ・レーメ先生の「広い知識と豊かな心を持ち、家庭・社会を担っていく人格を育て導く」という精神を守り続け、隣接する旭川藤星高等学校と同じ敷地内にあります。

2020年4月より藤学園から北海道カトリック学園に移管しました。移管後も教育方針・教育理念は変わらず、「一人ひとりを大切に」「一人ひとりの咲くべき花を咲かせよう」をモットーに教育活動を進めています。

教育活動の中には体育指導・英語指導・リトミック指導を年間カリキュラムに入れている他、遊びの内容も子ども達が体験から自ら考え行動出来る様に様々な体験活動



を取り入れています。また、グラウンドや芝生の園庭に恵まれ、園舎を囲む敷地は子ども達が伸び伸びと活動出来る環境があり、園の畑で野菜を育て、収穫後は焚火体験をし、焼きいも・焼きマシュマロなどをおいしく頂きました。冬になると園庭の雪山でスキーやスノーボード、チューブ滑りを楽しみます。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響から、今まで出来ていた活動が出来なくなり、あらゆる活動の変更などに悩まされましたが、全教職員との連携や情報を共有し合う中で沢山の事に気づかれ、今後の課題も見つけることが出来ました。神様の導きの元でこれからも子ども達、職員達が健康で元気に過ごし、末永く愛される旭川藤幼稚園を職員一同で守り続けて行きたいと思ひます。



園長 好井 千乃

コロナ禍という「不幸」の先に

藤女子大学人間生活学部保育学科
教授 高橋 真由美

元ノートルダム清心女子大学学長であった渡部和子シスターは、その著書に「天の父さまどんな不幸を吸ってもはく息は感謝でありますようにすべては恵みの呼吸ですから」という、牧師である河野進さんが書いた詩を紹介しています。この詩は私たちがおかれて今この状況に對し、示唆に富むものではないでしょうか。

この1年は、世界中の人々がこれまでに経験したことがない状況への対応を迫られた1年でした。私が勤務している大学でも、前期授業はすべてがオンラインでの実施となりました。また10月から始まった後期授業も、最初は対面で出来ていましたが、11月の第3波と言われた感染拡大により、再びオンライン授業が中心となってしまいました。

新型コロナウイルスは、子ども達の生活にも大きな影響を与えたことと思います。幼稚園の休園、外出の制限、人と距



新型コロナウイルスは、私たちに様々な試練を与えています。離をとらなければならない状況、大人が常に不安な気持ちを抱えている状況：など、いつもとは違うことが起こっていることを、小さな子ども達は敏感に感じとっていることでしょう。先日ニュース番組で、保育者がマスクを着用して保育することにより、保育者の表情が子どもに伝わりづらくなり、子どもが不安になったり、育ちに影響があることも取り上げられていました。新型コロナウイルスは、私たちに様々な試練を与えています。

人は何かしら試練を与えられた時に、「なぜこんなことになってしまったんだろう」「こんなことにならなければよかったのに」と起こったことを恨み、嘆き悲しんだりします。それは自然な感情であると思います。しかしながら人間には、起こってしまったことを恨み嘆いたあとに、この試練が自分に与えられた意味を考える力が備わっているのではないのでしょうか。その力を発揮することが、冒頭で紹介した「はく息は感謝でありますように」と願い、「感謝の息をはく」ということなのだと思います。もちろん、コロナ禍で大切な人を亡くしたり、経済的に大変な思いをするなどの深い悲しみや苦しみにある方はこの限りではありません。



美しい季節の変化を身体中で感じる事が出来ます。また少し歩くと、綺麗な花や木の実が沢山ある公園があります。乳児さんも散歩をしたり木の实を拾ったりと、沢山の自然を満喫しています。



0・1歳児さんはお散歩に行く時に玄関のマリア様に「いつてきます」をします。2歳児さん「いただきます」のお祈りが上手に言えるようになりました。幼児さんもクリスマスを取り組みが始まっています。これからも子どもたちが神様の存在を近くに感じながら、神様を通じて、様々な喜びを経験していけるよう見守ってまいります。

教務主任 今井 香織



0・1歳児さんはお散歩に行く時に玄関のマリア様に「いつてきます」をします。2歳児さん「いただきます」のお祈りが上手に言えるようになりました。幼児さんもクリスマスを取り組みが始まっています。これからも子どもたちが神様の存在を近くに感じながら、神様を通じて、様々な喜びを経験していけるよう見守ってまいります。



本園は大麻藤幼稚園としての53年間の歴史に幕を閉じ、2020年4月より、大麻藤認定こども園としてスタートしました。に仲間入りし、現在は全園児96名が元気いっぱい過ごしています。新園舎は2階建てです。ピカピカの廊下に広い保育室。窓も大きく、各保育室からは隣の公園が一望出来、木々の色の移り変わりなど、美しい季節の変化を身体中で感じる事が出来ます。また少し歩くと、綺麗な花や木の実が沢山ある公園があります。乳児さんも散歩をしたり木の实を拾ったりと、沢山の自然を満喫しています。



園紹介

大麻藤認定こども園

恵みを感じながら秋を満喫しました。隣接する大麻教会は8月に献堂式があり、幼児さんはようやく10月に入園する事が出来ました。教会という場所に初めて足を踏み入れる子どもも多かったですが、初めて訪れた時は静かな雰囲気な包まれ、こちらが多くを言わずとも、教会がどのような場所であるかを子ども自身を感じ取っているようでした。



倶知安藤幼稚園

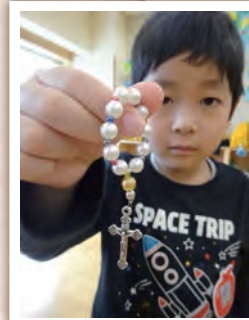
『祈る』ということ

教諭 佐々木 麻千子

「世界中の人たちが幸せに暮らせますように…」共同祈願の中で、子どもたちは自分たちのことだけではなく世界中に目を向け毎日お祈りしています。

自園では運動会が終わると年長児はロザリオ作りを行います。ビーズをテグスに通し、十字架を付けて一人一つずつ『世界で一つだけのロザリオ』を完成させます。そして10月になるとそのロザリオを使い、祈りを捧げます。また誰かのために祈りを捧げた時は、折り紙でバラの花を織り、ロザリオに見立てて飾っていきます。子どもたちの祈りで、廊下はバラのロザリオでいっぱいになりました。祈りを通して神様と心を通わせ、誰かのために祈る優しい心、思いやりの心、毎日を幸せに暮らせることへの感謝の気持ちが、子どもたちの中に日々芽生えていると感じます。そして、年長児の姿から年中児や年少児は祈ることの大切さを受け継いでいるのだと思います。

今年は子どもたちから「コロナウイルスで苦しんでいる人たちが一日も早く元気になりますように」とのお祈りをよく聞きます。自分のためだけではなく、今の世の中の情勢に目を向け、様々な場面を想像しながら、あらゆる人のために祈る心を大切にしていきたいです。

カトリック聖園
てんしのおうち

笑顔と愛があふれるメダル

保育教諭 久野木 慧実

てんしのおうちは先生のお部屋から2つのクラスを見渡すことが出来る小さな保育園です。子どもたちはもちろん、保護者の方とも身近に関われることが大きな魅力の一つだと感じています。子どもたちの成長をみんなで見守りながら、保護者の方の沢山の協力を得て、日々保育を行っています。

今年度は新型コロナウイルスの影響により例年通りの運動会の開催が難しく、保育中に子どもたちだけで運動会ごっこという行事を行いました。その際、運動会後のプレゼントとして保護者の方にメダル作りの協力をお願いしました。お忙しい中、快く引き受けて下さり子どもたちの大好きな猫や新幹線、キャラクターなどを使った愛情いっぱいのメダルにお子さんを思う気持ちが伝わってきました。一生懸命頑張った運動会后、保護者の方が作ってくれたメダルを首から下げた子どもたちの笑顔がとてもまぶしかったです。

小さな子どもたちにとってはトイレトレーニングや食事、お友達との関わりなど、沢山の楽しさと同時に、初めての事や大変な事も多くあります。子どもたちの「できたよ!」の笑顔と一緒に喜びながらこれからも保護者の方と見守っていききたいと思っています。



さゆり幼稚園

わくわく!キラキラ!「あそびの日」

教諭 高橋 康子

さゆり幼稚園では月に一度行われる『あそびの日』があります。この日は登園して身支度を整えたら、あらかじめ決められた場所に、自由に移動して一日中あそべる日。「何して遊ぼうかな?」「牛乳パックたくさん用意しておいてね!ロボット作るから!」と前日から遊びを考えている子もいます。好きな遊びを見つけ、友だちと関わりながら自由に遊び込んでほしいと願い、いろいろな環境を設定します。先日はビニール袋で衣装を作ると、ファッションショーが始まりました。大きな段ボールで家を作ったり、新聞プールで魚釣り。園庭では人気の、ふわふわの泡を作る石鹸あそび。毎回、あらかじめ予想して環境を設定しますが、遊んでいくうちにどんどん子どもたちの発想が膨らみ、思いがけないものへと発展し、いつも驚かされます。やはり子どもは遊びの天才です!様々な遊びを経験し、じっくり取り組む姿、年長組が年中少組の子に優しく関わったり、友だちと協力して一つのものを作り上げた時の達成感、嬉しさや喜びを共有できるととても素敵な1日だといつも感じています。これからも子どもたちがわくわく!キラキラ!できる「あそび」に出会えますように。

カトリック聖園
こどもの家

思いやりの心

保育教諭 佐藤 南

不安と期待でいっぱいだった年少クラスの子どもたちも、幼稚園での生活に慣れ、半年が過ぎた秋の日のことです。神様から頂いた自然の恵みを感じながら、色づいた落ち葉を集めては、「お母さんにプレゼントする」と秋を探したり、虫を網で捕まえるのを楽しんでいました。

秋も深まったある日、死んでしまったトンボを見つけた子どもたちを見守っていると、一人の子が「可哀そうだから土に入れてあげようよ」と声を挙げ、みんなで土に埋めてあげていました。その後から、園庭でミミズを見つけては、「みみちゃん」と名前を付けたり、お家を作るなど生き物を大切にする姿も見られました。子ども同士の関わりの中で、生き物を思いやる心が育まれているのだなと感じる出来事でした。

日々の保育の中で、様々な経験を経て神様を身近に感じ、思いやるやさしい心が育っているのを感じています。これからも、心身ともに成長できるよう見守っていききたいと思っています。

